

麗澤に学んで



令和3年度

麗澤高等学校

麗澤高校の道德教育

麗澤高等学校では、毎朝のショートホームルームにおいて、教室に掲げた『心のカレンダー』（本校の教育理念の根幹である「モラロジー」の内容を、カレンダー形式に31の格言にまとめたもの（公益財団法人モラロジー道德教育財団刊）を生徒が読み上げることから一日がスタートし、週に1時間全クラスで道德の授業を行っています。この授業は本校の人間教育の大きな柱をなし、クラス担任が中心となって進めています。授業は、テキストである『最高道德の格言』（本校の創立者である法学博士廣池千九郎の格言集。公益財団法人モラロジー道德教育財団刊）に掲載されている格言についての生徒による研究発表から始まります。これに続いて、「モラロジー」を土台として「感謝の心、思いやりの心、自立の心」を育むことを念頭に、本校の教員がそれぞれの知識や経験に基づいて授業を展開します。

一方で、男子寮・女子寮では学園創立以来、道德を实践する場としてのモラロジー教育・麗澤教育が脈々と受け継がれています。朝礼・夕礼、規律正しい集団生活を通して、父母・祖先・および恩人に感謝する心、相手を敬い思いやる心、率先垂範の心がけなど、様々なことを学んでいます。

ここでは、令和3年度の寮生活において、保護者学級で発表した内容、格言研究として夕礼で発表した内容、合同夕礼所見など、生徒が寮生活で得たことや学んだことを紹介させていただきます。

まず、この格言がどのような内容なのか簡単に説明したいと思います。この格言は、どのような人に対しても思いやりを持って接し、また、お世話になった方々には感謝の気持ちを忘れずに、恩に報いていく努力を続けるという格言です。

ここからは自分の体験談をこの格言をもとに話していきたいと思います。

突然ですが皆さんは自分の両親の良いところを言えますでしょうか。自分の父は見た目の通り、あまり口を開かないほうで、おとなしい雰囲気ですが、実は家ではとても話すほうなんです。仕事から帰って夕食を食べ終わると、酔っているのか、人間だとは思えないぐらい顔を真っ赤にして自分にダルがらみをしてきます。誰も知らない昭和のギャグみたいなのを言ったりしますが、全然面白くありません。いつも一人でボケて一人で笑っています。そんな父ですが、感謝していることもあります。それは、自分のことを一番に応援してくれていることです。自分は小学生のころ、ずっと柔道クラブに通っていました。大会の時、いつも父が見に来てくれていました。

仕事で疲れているのに、朝四時ぐらいに起きて送ってくれて、試合のビデオもずっと撮ってくれていました。また、必ず試合の前には「負けてもいいから勝ってこい。」と自分に言ってくれていました。当時は全然何を言ってるか分かりませんでした。だんだん大人になっていくにつれて負けてもいいが、気持ちでは負けるな。という意味だったことに気づくようになりました。違っていたらごめんなさい。父が覚えているかわかりませんが、ある柔道の大会で三時間かけて会場に行き三秒で負けて帰ってくるという日がありました。その日、コーチに自分は「何しに来たんだ。」と怒られましたが父は笑いながら慰めてくれました。本当にあの頃はずっと近くで応援してくれてありがとうございます。中学生になっても高校生になっても父は部活動や勉強のことでアドバイスをくれたり、ずっと応援してくれていました。気づけば自分はもう高校三年生、そして父は五十五歳になりました。

今度は自分が恩返ししていく番だと思います。父にはたくさんのお話を教えていただきました。この寮に入れたのも父のおかげです。そして、親子そろって寮長になれたのも寮生活をずっと応援してくださった父のおかげだと思っています。父はとても思いやりがあって何事にも一生懸命でとても尊敬しています。これからもよろしくお願いします。

そしてお母さん。毎晩おいしいご飯をありがとうございます。中学二年生まで一緒に寝てくれてありがとうございます。いろいろなものを買ってくれてありがとうございます。入寮祝いで高い時計をくれたときとても嬉しかったです。「大切にする。」と言ったのに、入寮し一週間で失くしてしまい申し訳ございませんでした。母にもたくさん感謝しています。これから自分が、恩返ししていきたいです。

話は変わりますが、さきほどの格言にもあったどのような人に対しても思いやりをもって接する。これは、寮で生活する上で最も大事なことだと思います。ドラマ十四世をご存知でしょうか。以前麗澤にもいらっしゃったチベット仏教最高指導者の方なのですが、彼の有名な言葉に、「他人が幸せであってほしいならば思いやりを持って行動しなさい」というのがあります。つまり思いやりを持って行動すれば、周りが幸せになれるということです。

皆さんは今、思いやりを持って行動できていますでしょうか。両親に対しても思いやりを持って接していますでしょうか。自分は今反抗期の為、思いやりを持って接しているとは、言い切れませんが、これから思いやりを持って家族とも接していこうと思います。ぜひとも皆さん思いやりを持ち、家族を大切にしていきましょう。

最後になりますが、あらためてお父さん、お母さん、今まで支えてくれてありがとうございます。そして、共に生活しながら支えてくれた六年生、そして先生方ありがとうございます。寮生活も残りわずかとなりましたが、ぜひともこれから宜しくお願いします。

体験発表（保護者学級での発表）

6年G組 男子寮3寮 小林 琉聖

自分は体験発表をさせていただくにあたり、4年生から始まった3年間の寮生活で学び得たものを発表させていただきます。

皆さんは入寮する時にどういう理由で入寮したのでしょうか。私は、祖母の紹介で麗澤に入学しました。しかし、今では麗澤に入学をして本当に良かったと思っています。私は、中学時代は自己中心で物事を考えていました。忘れ物も多く、時間にもルーズでしたが、寮に入ったことでそれは変っていったと思います。4年生では、上級生から教わった部屋の役割をさせていただくことで自己中心的な考えから、他者中心的な考えに変わっていきました。他人のことを考えて動くというのは、それまであまり経験がありませんでしたが、いざ実践すると、とても難しく感じました。その中で学んだことは、与えられた役割をただこなすだけでなく、その意味を考えて行動することによって、新たな考えを持って役割をこなすことができるということです。例えば、挨拶ひとつをとっても、ただ大きな声で挨拶をするだけの動作としてではなく、礼儀として考えてみると違って見えてくると思います。相手の目を見て、誠意を持ってしっかりとした気持ちのこもった挨拶をすることで、自分の品性を開花させることに繋がってくると思います。また、言葉使いでも前よりも気をつけるようになりました。自分は滋賀県から来ていたので関西弁とは違いますが、関東とはイントネーションが違うので、よく注意を受けました。こっちに来た時は、色々な違いがあったりして戸惑いながらも自分の役割をこなしながら生活をしていました。

5年生になると、下級生のお世話をさせていただくこととなります。そこでは、相手に役割を正しく教えるということをしてきました。そこで思ったのは、自分に教えて下さった上級生に対する感謝の気持ちです。失敗しても、すぐには怒らず注意をしたりそこからの行動を見たりと、いろいろ考えて動くことが多くなり、うまく行かない時もありましたが今ではいい経験になったのではないかと思います。

6年生では、最上級生としての心構えを持ち行動してきました。下級生を教える立場から離れましたが、係活動や今年から始まった運営会議など自分たちの代では、変化したことがいくつかありました。その中で相談しあって様々なことを決めていきました。3年間寮生活をしてきて思うことは、仲間の大切さです。4年生の時は話し合いの場が数多くあり、改善点などを話し合い、意見交換をしていました。このように集まって話し合うことは、今まで

してこなかったので新鮮味もあり、こういう場でしっかりと意見を言うことで、自分にとっても相手にとっても最良な方法を知ることができました。

3年間の寮生活で身についたことを格言で表すと「他人の欠点我これを補充す」です。なぜこの格言なのかというと、寮での失敗を責め合うのではなく注意しあい、互いに補い合うことで協調と信頼関係が生まれ、それにより様々なことが円滑に進むようになりました。また、寮生活をしてきて痛感したことは、親のありがたさです。洗濯物や掃除など生活をする上で必要となるものを自分一人分だけとはいえ、毎日するのはとても手間がかかると感じました。また、問題に直面したときに相談相手としてもお世話になりました。自分是要領が良くないので迷惑をかけたりにしてしまっていたことが多々あると思いますが、いろいろ手助けをしてもらいました。寮に入ってから、いかに家族に頼りつきりだったのかを自覚するとともに、自立できるように努力しようと思いました。今、完璧に自立をできたかと聞かれるとできていないと答えますが、入寮前よりは遥かに自立できているのではないかと思います。また、母はシングルマザーです。母や祖父母と暮らしていましたが、不自由を感じることはありませんでした。母が一から看護の勉強をして自分を育ててくれたことには感謝しかありません。昔は父親がいたら今とどう違っていたのかということは何度か考えたことがありましたが、今では母だけであっても良かったと思うようになりました。父親の顔は、自分が物心つくまでに別れたと思うので知りませんが、今ここに立っていられるのは母及び家族のおかげということを噛みしめています。色々反抗したりしたこともありましたが、心の奥では感謝しています。色々不甲斐ないところがあると思いますが、これからもよろしくお願いします。

以上で体験発表を終わりにします。拙い文章でしたが、ご清聴いただきありがとうございます。

男女合同夕礼 寮長所見（寮生全員への所見）

6年B組 男子寮2寮 津田 尚人

みなさん、こんばんは。

本日は自分が上級生から聞いた話の中で、好きな話を1つさせていただきたいと思います。男子寮の6年生には聞いたことのある人もいますが、4、5年生を中心に聞いたことのない人も多いと思いますので話したいと思います。

みなさんは、「信用」と「信頼」の違いをご存知でしょうか。どちらも「信じること」という点では一緒ですが、自分にその話をしてくださった上級生は、このようなことをおっしゃっていました。「信用」は「信じて用いる」と書く、「用いる」とはものに対して使う言葉である。「信頼」は「信じて頼る」と書く。「頼る」とは人に対して使う言葉である。どちらも似たような場面で使われることが多いが、その2つには大きな違いがある。自分ならどちらを人に対して使いたいか。どちらを自分に対して使ってもらったか。答えは明白だ。そして、「信頼」を築きあげるのには長い時間を要するが、失われるのは一瞬だ。だからこそ人は「信頼」を大切にしないといけない、と。

自分は人に頼られるような人になりたいと、この話を最初に聞いた時思いました。みなさんは、今の話を聞いた時なにを思いましたでしょうか。

実はこの話を今回したのは、もちろんみなさんに信用される人よりも信頼される人になろうと伝えたいの也有ります。さらに、寮内でのコミュニケーションを正しくしっかり取れていますか。特に上級生と下級生との間でうまく取れているかどうかをみなさんに考えてほしいのです。自分は寮生活において大事なことの一つに、人との繋がりを大切にすることがあると思います。寮の上下関係が部活や学校での上下関係と違うところは、上級生から聞いた話を今の自分のように下級生に向けて話をするところだと思ひます。寮には今話したような話がたくさんあると思ひます。同じ話を上級生から下級生に、そして、その下級生からまた更にその下の下級生に伝えられていくことで、何かに気づいたら伝統としてその話が残っていくのだと思ひます。

まもなく中間試験がやっけてまいります。これはあと1ヶ月ほどで6年生は寮から離れ4、5年生は2学年だけの寮生活が始まることを意味します。なくなったあとに気づく有難さという言葉も有りますが、6年生はまぎれもなく2年半寮生活を行っけてきています。その時得た経験や知識は、必ず下級生になんらかの形でよい影響を与えることができます。今の6年生が完璧だとは言うつもりは微塵もありません。ですが、5年生には6年生がいる期間に学べるだけのことを学んでほしいと思ひますし、適切な距離感で相談や話をしてもらいたいと思ひます。もちろんそれができる4、5年生だと確信しているわけですからこういうことを言っけています。6年生は受験本番も近づいてきて、指定校推薦やAO推薦などそれぞれ慌ただしくなっけてきたと思ひますが、まだ4、5年生との寮生活は終わっていません。伝え残したことがないか、もう一度確認して残り少ない時間を大切に過ごしてまいりましょう。

「労をも資をも神に捧げて施恩を思わず」（夕礼時の格言発表）

6年D組 女子寮17寮 矢野 夏光

突然ですが皆様は日本が綺麗だと言われる理由をご存じでしょうか。日本を訪れる外国人の誰もが驚くこと、それは街の綺麗さだそうです。

日本は、町中にあるいは東京都心にも、公衆ゴミ箱をあまり置いているわけではありません。ではなぜ、日本人はポイ捨てをあまりしないのでしょうか。その理由を四つご紹介します。

一つ目は、「誰かがやっけてくれるだろうではなく、自分たちで綺麗にする」という考え方を持っているからです。日本では、小学校から高校までの12年間、自分たちで掃除をする習慣があります。これは世界でも稀有なことです。担当を分担し、実践することは集団の一員としての自覚を深め、責任感が生まれるそうです。これによって、自分たちで使う場所は自分たちで責任をもって綺麗にするという概念が、知らず知らずの間にできます。

二つ目は、集団主義的思考です。小学校で、「前ならえ!」と前の人にならっけて列をきれいにして人の話を聴く習慣があり、これがみんなで美しくすることにつながります。

三つ目は、ゴミを分別する意識。

四つ目はボランティア活動です。麗澤でも SDGs の研究会や委員会中心に様々な活動が行われています。また、私の住む地域でも町内掃除を行う日があります。このように自分たちの属する場所に敬意を払って、街全体でお世話になる所を綺麗に保とうとする意識があります。

この四つが顕著に現れたのが、サッカー・ワールドカップ・ロシア大会です。負けて落胆しているにも関わらず、更衣室にロシア語で「ありがとう」と書かれた紙を置いて帰った選手たち。サポーターも、残されたゴミをすべて拾う姿が注目されました。私が所属しているラグビー部でも、コーチは「チームが強いかわいいは、荷物の整え方でわかる。まずプレーする前に自分の荷物を整え、揃ってグラウンドに感謝しろ」とおっしゃいます。そのため、荷物をきれいに並べるまで部活はスタートしません。このように、物、場所を大切に作る気持ちは生きていく上でとても大事で、すべてのことにつながります。心がきれいな人は「態度、行動、発言」が揃っている人、当たり前への感謝に気づく人と言われています。

今の自分があること、今の環境にいられることは、誰かの支えがあってできることです。その感謝の気持ちを、ゴミ拾いなどの小さなことから表せるようにし、より良いものを作ってみてはいかがでしょうか。

格言とは離れ、大変まとまりもございませんが、格言について考えたことを述べさせていただきます。

「三年間の寮生活を振り返って」（保護者学級での発表）

6年B組 女子寮17寮 艦居 美穂子

現在六年生体制の寮となり、正規の寮生活が終わった今だからこそ 私が言えることは、「寮生活を三年間やり切った」というのは自分の大きな自信につながるということです。私の寮生活を一言で言うならば、自分と向き合い、他人と向き合い、寮生活と向き合った三年間でした。そして、この三年間で、私は人間関係を築いていく上での「自分のスタンス」ができたと思います。

私は5年生の二学期の頃、自分も周りも寮生活も何もかもが嫌になって、家に帰ったことがありました。その時の私は、ある同級生と仲違いしたことがきっかけで、彼女が自分のことを理解してくれないことと同時に、自分も彼女をわかってあげられないこと、きちんと本音が言えない自分、私が言ってしまった言葉への罪悪感でいっぱい、人の言動に敏感になっていて、人と関わって自分が傷つくことも、自分の無自覚な発言によって誰かを傷つけてしまうこと、周囲からの期待を裏切ってしまうことが恐くて仕方がありませんでした。家に帰ってからも、ただただその苦しさに涙するばかりで、将来この先もずっとこの恐怖心を抱えていくのかという思いで、出口の見えないトンネルを一人ですっと歩いているような感じでした。寮に戻るきっかけになったのは、麗澤の寮の卒業生である母の友人と電話をして「人に傷つくこともあるけれど、その傷を癒すのも人なのだ」と言われたことでした。人と関わる恐怖心は消えないものの、再び寮に戻って少しずついいから自分のスタンスを築いていこうと決心しました。私はその時から、部屋っ子ノートとは別に、自分の「心のノート」を書

き始めました。嬉しいことや悲しいことなど感情が動いた時に、その出来事やキッカケと感情をメモして、自分はどういうときに落ち込んだり、悲しいと感じるのかを知るためと、夕礼や本や日常生活の中で耳にした素敵な言葉をメモしたり、自分の心の吐き出し口としてノートを作りました。この一年間の寮生活でノートが一冊終わり、この発表をするにあたって見返してみると、あの時はこんな事を考えていたんだなあと思い出します。私はこのノートと周りの人たちの支えによって何とか寮生活を送ることができたと思っています。

そして帰ってきてからの寮生活で、私は「自分は相手のことが百パーセント理解できるわけでも、相手が百パーセント自分のことを理解できるわけでもない」を前提に持つことが大切なのだと思います。けれども、相手と心を通い合わせられるように、もちろん努めるし、もし人とうまくいかなかったり、ぶつかったりする時は、それがその人の信念や価値観に基づいている結果なのだと否定も肯定もすることなく、ただ理解することが必要だと思います。では、ただありのままのその人を受け入れるには何が必要かという、その人の背景を読むことだと思います。背景を探ってみると、ただ単純な理由だったということもありますが、育った環境や経験が要因だったということもあります。「その人が、そんなことを言う理由(わけ)は何だろう」と考えることは、その人が本当に言いたいことへの理解にもつながるし、案外共感できることもあるのだと知りました。

六年生になってからの学びは、最上級生であると同時に、寮長という立場を頂いて学ばせて頂くことが多くありました。寮長になったばかりの頃はどちらかという、不安ややりたくないという気持ちが強く、寮長を引き受けたことを後悔していました。それと同時に、何とかやっていかなければと思いつつも、自分は寮長としてどう在ればいいのかと模索していた時期でもありました。前の寮長さんに電話して相談してみたり、市川先生に相談して、結局たどり着いたのは「私は私のままでよくて、今の自分ができることをする」ということでした。寮長だから特別何かをしなきゃ、というのではなく、「寮生の一人」として、今自分ができることに注目してやること。四、五年生の頃は六年生が一番楽そうだと思っていましたが、六年生になって、一番大変な学年だと気づきました。勉強や人間関係で何かツライことがあったとしても、そういった雰囲気を出さないこと、四、五年生を見守り続けること、でも必要だと思ったらきちんと相手に伝えること。やはり、三年間の寮生活をしていると、相手の嫌なところが目に入ることがあります。学校だけの友人だったらこんな所を見なくて済んだのに、ただのよい友達でいられたのにと思うことが何度もありました。ですが、今までの経験を通して相手の嫌なところに気づくことがあったとしても、この子はそういう子なのだと受け止めて、その子のいい所を、一緒に過ごしていく中で探して更新していくことで、もっと仲良くなれるのだと気づくことができました。人と関わって傷つくことへの恐怖心というのは薄らいだとはいえ、やはり怖いものだと思います。でも、人は一人で生きていくことは出来ません。それに、私たちは人間で、完璧な善人でいられることはないです。だから、自分の言葉に傷ついたり、思わず自分が言ってしまった一言で相手を傷つけてしまう、そんな心の弱さを皆それぞれ持っていて、お互いにその弱さを許し合っているのだと思います。そうすることによって、人に許されたり、支えられていることの有り難さに気づいたり、人の痛みに寄り添える人になったりするのではないのでしょうか。

そして、三年間を通して学んだのは、何より「人」にどれほど支えられているかということです。特に、家族には、本当に言葉では表しきれないほどの感謝でいっぱいです。入寮の日に見送ってもらったこと、いえもっと前から、私はたくさんの愛をもらってきました。五年の時に、家に帰ると決まった日も、急なのに迎えに来てくれて、家でたくさん話を聞いてくれて、それだけですごく安心したのを覚えています。四、五年生の時にも、今までの生活を支えてもらっていたのは両親のおかげなのだ気づき、感謝したことは何度もありましたが、それまでの比ではないくらい、絶対的に私の味方である両親や家族の存在に救われました。本当にありがとうございます。他にも、私をここまで育ててくださった部屋中さん、温かく見守ってくださった部屋長さん、相談に乗ってくださった学校の先生方、連絡を取り合ったり寮生活を応援してくれる中学の頃の友人、仲良いクラスメートたち、かわいく癒してくれる寮の頼もしい後輩たち、一緒に寮生活を乗り越えてきた同級生たち、どの縁もとても大切に、かけがえのないものです。冒頭でも、述べたように、寮生活を終えた今だからこそ言えるのは、友人たちとぶつかったり仲違いしたりしたこと、その経験すらも今の私を構成する要素の一つで、むしろ私を成長させてくれた良い機会だったのだと思います。そう気づけたのも、寮で様々な経験を積んだからこそです。もう一度寮に入りたいかと訊かれたら、はっきりイエスと言えないし、ただただ楽しい時間だったとも言いきれない寮生活だけれど、この寮生活で私は多くのことに気づき、学ばせて頂きました。

「女子寮は宝の山」と言われます。これは、私が四年生だった時に、当時の寮長さんがおっしゃっていた言葉です。私は寮に入って多くの宝物を見つけることができました。「一番の宝物は何？」と訊かれたら、私は「女子寮で出会った、素敵な人たちとの縁」だと答えます。ご清聴ありがとうございました。

「大切なこと」(保護者学級での発表)

6年H組 女子寮16寮 影浦 吏沙子

書ききれないわけがない。この作文を書くにあたって先生に五枚の作文用紙をもらった。書ききれないわけがない。作文用紙5枚に収められるほど私の寮生活は簡単じゃなかったし、薄くなかった。私にとってこの寮生活は、良い意味でも悪い意味でも学びが多かった。多すぎた。言い出せばきりがないので、自分にとって一番大切なことを書こうと思う。

二〇一九年四月四日、桜が満開の快晴の中始まった寮生活。この高校に入ったのは自分の意志ではなく、親に無理矢理入らされ、嫌々だったけれど、なんだかんだいって多少なりと期待を抱き、家を出られるという喜びを感じていたのを覚えている。初めて顔を合わせたこの九人のメンバーと初々しく会話をしたのが昨日のここのように思える。

私はこの寮、この高校のことが大嫌いだった。四年生の一学期、毎日楽しく過ごそう、頑張ろうと努力して自分なりに生活していたが、上級生からの想像もしていなかった指導や、慣れていない環境での自分のすべての身の回りのこと、掃除や週番、あいさつなど覚えるべき膨大なこと、入寮前には自分ならできると思っていたことは意外にも難しく、今までの自分は当たり前前にできていなかったんだと身にしみて感じた。早く寮生活に慣れようと努力

し、言われたことはしっかりやろうとしていたつもりだったが、上級生から言われることはいつも注意ばかりだった。

寮生活もうまくいかず、学校では人間関係に悩み、部活でもなかなか上達せず、学力も低下してゆき、本当につらかった四年生の一年間だった。

五年生になり、学年が上がっても良好とは言えない生活を送っていた私は、寮が嫌で嫌でしかたなかった。何度も寮をやめたい、麗澤をやめたいと思った。全然楽しくないし、良いことなど何もない。どうせ、これから先も何も良いことはなく、何も学ばずに卒寮するんだろうな、何のために寮に入ったんだろう。そんなことを思いながら生活していた中、私に思いがけない転機が訪れた。

それは、五年生の十二月ころ、寮生活も残りわずかとなり、すべてを諦めていた頃だった。私は麗澤で出来た唯一の親友だと思っていた子に裏切られた。どういうわけか、悪いことは重なり、それと同時に大切なものを次々に失っていった。本当に絶望を感じ、つらくて本気で麗澤をやめたいと思った。もう失うものは何もなかった。身も心も苦しかったとき、帰省の時期に入った。早く家を出たいと思っていたほど家が嫌いだった私だったが、この時初めて家に帰りたと思った。家に帰ると待っていたのは温かく美味しいご飯だった。私のことを気遣ってくれる家族と美味しいご飯に囲まれ、私は今までこらえていた涙がとまらなかった。寮に入る前、家に帰って、家族と美味しいご飯が待っているのは毎日のことだったが、私は果たしてそのことで泣いたことがあっただろうか。寮に入る前は当たり前だったことが泣けて泣けてしょうがなかった。大切なものをすべて失ったと思っていた私だったが、「家族」という存在がまだ残っていた、唯一の希望だった。このとき、ようやく家族の大切さに気付いた。今までも何回か、作文で家族の大切さを書いたことがあったが、きれいごとを書いているようだった。それはきれいごとがきれいごとでなくなった瞬間だった。

思い返せば、家族はいつでも私の味方だった。年中反抗期の私を許してくれて、何をしても許してくれるのは、家族だけだった。他人や友達に対して同じような態度をとると簡単に人間関係が崩れることも、家族に対してだと次の日には許してくれる。家族はいつでも心強い味方だ。

家族の大切さ、偉大さに十八年間生きて来てやっと気付いた。入寮前、「寮に入ったら、親のありがたさに気付くよ」と誰からも言われたが、当時の私は掃除とか洗濯とか正直自分で出来るし、親元離れても一人で生きていけると思っていた。だが、そうではなかった。親の有難さっていうのは、掃除とか洗濯とかをやってくれることじゃなくて、そばにいてくれること、遠く離れても見守ってくれることだった。帰る家があるから頑張れる、遠く離れても見守ってくれる人がいるから踏ん張れる。私はそう思う。

家族の大切さに気付いた私は、親に対して感謝しかない。入寮してから初めて帰省したゴールデンウィーク、父のちょっと不器用だけど愛情のこもった温かい手作り料理が待っていたこと。送ってほしいものを伝えたら次の日には届けてくれたこと。私の生まれ故郷の愛媛のみかんを毎年毎年段ボールで送ってくれたこと。帰省すると必ず私の好物を好きなだけ、胃が破裂するほど沢山食べさせてくれたこと。寮生活で疲れているだろうからと言って、いつも気遣ってくれていたこと。大学受験の話をするとき「お前の好きなようにすりゃええ」と言ってくれたこと。保護者学級や入学式などの行事に、仕事が忙しいはずなのに絶対に来て

くれたこと。受験の年に厄年だからと言って二か所の有名神社へわざわざ連れて行って厄払いさせてくれたこと。何気ない、一つ一つの厚意が私の活力になっていたことに初めて気付いた。

本当に、感謝しかありません。十八年間生きて来て、沢山の手に手をさしのべられてきた。けれど、その沢山ある手の中で一番強かったのは、まちがいなく父の手だった。それはきっと誰よりも厚く、たくましく、太く、優しい手だった。私はその手を何度ふり払い、傷つけたかわからない。それでもまだ丈夫で、何でも包み込んでくれる愛がそこにはある。私にとってかけがえのない存在だ。

大切なものを失って、失って何もなくなって、最後にあるのは家族だと気付いた。大切なことは、さしのべてくれる手をどう増やすかじゃなくて、さしのべてくれる手を失う前にどう大切にするかだと思った。決してふり払うようなことなど絶対にはいけないと思った。

家族の大切さに気付くことができた私は、考え方が百八十度変わった。家族以外の人々にも感謝の気持ちがわき出た。家族以外にそばにいてくれる人がいるありがたさ。勉強を教えてくれる先生がいるありがたさ。相談に乗ってくれる人がいるありがたさ。遠く離れても仲良しでいてくれる人がいるありがたさ。

私は決して一人じゃなかった。こんなにも身近にある恩恵を当たり前だと思っていた私は、見えている世界が狭かった。

私がある人に話を聞いてもらったとき、言われた言葉がある。「失った分、何か得てるんですよ」その時は何を言われているのは分からなかったが、今は本当にその通りだと思う。失ったものが大きかった分、得たものも大きかった。辛いことが大きく多かった分、小さな嬉しいことが大きく感じるようになった。

大切なことを気付かせてくれて、私を大きく成長させてくれたのは、この寮、この麗澤のおかげということに間違いはないけれど、傷つけられ苦しい思いをしたのもこの麗澤だから、この高校に感謝はしているが、正直複雑な気持ちだ。この寮に入ってよかったと百パーセント言い切れるかと言ったら嘘になるが、かと言って入らなければ良かったとは一ミリも思っていない。胸を張って、寮に入って良かったと言えないのがたまらなく悔しい。もう一度、高校生活をやり直すとしたら、私は寮生活をするだろうか？ 麗澤に入るだろうか？ 麗澤高校に入学する時に私が書いた作文にはこう書いてある。「今まで沢山の方々にお世話になりました。私はこれから始まる寮生活を通して成長し、自立した人間になって将来役に立つ人間になることが、お世話になった人々への一番の恩返しだと思う」と。

三年前は入寮するためだけに、ただ並べた、きれい事だったが、今は違う。本気でそう思う。まさか、寮生活でここまで自分の人間性、考え方が変わるとは本当に思っていなかった。本当に大切なことは今まで過ごしてきた日々の生活にあったのかもしれない。御静聴ありがとうございました。